

The Gallery voice No-66

編集・発行／ 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2022.5.20
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

—No man's land— 視点を交える旅

仁添まりな

「No man's land」それは誰の手も加わらない、中立地帯。大学院の博士課程を修了するまで、私の制作テーマは一貫して「楽園」でした。今回の個展では、自身の思い描く楽園から、少し違った新たな理想郷を求めて旅をしたい、そんな気持ちから、視点を交える旅へと向かいました。



『宝冠鳥』(絹本着彩・2022年)

いつもどんな風に制作しているの？と聞かれることが多いのですが、実際にはとても身近なモチーフしか描いていません。仲の良い生物系の研究者たちと山に行き、自然のなかで出会った生き物や植物をスケッチし、何気ない日常の散歩中に見つけた、虫や道端の草木からアイデアをもらう事も多いのですが、博物館で見た異国の陶磁器や染織物、虫の標本、動物たちの剥製などから形や色彩のアイデアをもらうこともあります。そのほか、デザイナーの友人たちとショッピングに行った時にハイブランドのファッションやテキスタイルデザインを見て学ぶことも多くあります。特にこだわりがないと言えばこだわりはないのですが、思うままに、好きなものを混ぜて何だかうまく言えないプロセスを経て、まとまっていった産物が多く、一言では説明し難い作品が多くなってしまいました…。そんななかでも、一定のルール、組み合わせ方のようなものが、おそらく無意識に自分のなかにあるので、それに気づいて読み解いてくれる方に、解釈はお任せしたいと思います。



『アマリリス』(絹本着彩・2022年)

描くモチーフへの愛と関心が根本にあるので、私個人の感情を伝えたい、というより、モチーフの面白さを記号化して絵の中に物語として組み込んでいるという感覚が大きいかもしれません。

下図を描いているときはひとつひとつに意味を考えて構成しているので、意外と冷静なのですが、本図に入っている瞬間を超えると、画面と自分の指先が一体化して没入しているような感覚に陥るので、絵の中にこれ以上入って、出てこれなくなることはないように、ある意味、自分と画面の間に線を引く行為でもあります。

蝶は蛹の中で、スープ状になるらしいのですが、絵を描いているときはまさしくそういう感覚なのかもしれません。それが言えるなら、私の作品はきっと私が溶け出した繭、凝縮した一滴の雫なのかもしれません。

今回の旅では、私の生み出した愛しい繭たちを、たくさんの人のもとに送って、旅をさせたい。また、それを受け取ってくれる人たちに出会うための旅がしたい。そんな気持ちで描かせていただきました。私の作品は人生にとって、必ずしも役立つものではないのかもしれないけれど、誰の手も加わらない場所で、あなただけの大切な場所を守るために、私の愛しい繭たちを連れて行ってはくれないませんか。(琉球画家/にぞえまりな)

それは、はじまりの旅 —新たな琉球絵画の創造にむけて—

金城美奈子

「琉球絵画の花鳥楽園」という独創的なテーマに取り組み、近年、目覚ましい活躍を見せる仁添まりなの個展が画廊沖縄で開催される。沖縄県立芸術大学で日本画を専攻した仁添は、学部生のときに琉球絵画の花鳥画に魅了され、同大学院では琉球の花鳥画史を研究した。そして中国絵画やその影響を受けた琉球絵画の模写と創作の実践を通して、現代における琉球絵画の創造を目指し、奮闘してきた。

昨年、大学院後期博士課程を修了し、新たな創作活動をスタートさせた仁添。今回の個展「No man's land—視点を変える旅」は、そんな仁添の現在の心境を表すとともに、次なるステージへの飛躍を予感させる。これまで琉球絵画の描法を取り入れながら、大きな画面の中で多種多様な動植物を中心に、あらゆる国や地域の物語、神話、宗教、思想のエッセンスを融合させ、濃厚で独特な“気”に満ちた作品を描いてきた仁添。今回はあえて小品を中心とした展示構成にしたという。小さな画面の中で沖縄の身近な植物や生き物を、一つ一つ取り上げて画題としている。この創作姿勢の変化は、仁添自身が原点に立ち返る行為のようにも思える。なぜなら個々の「モチーフへの愛や関心」こそ、彼女が構築してきた作品世界の根幹を成すものといえるからだ。仁添にとってこの「視点を変える旅」は、改めて自分の原点を見つめる契機にもなるだろう。



『琉球桃鳩図』(絹本着彩・2022年)

そんな仁添の現在地点をふまえ、私が注目するのは《琉球桃鳩図》である。彼女のウチナーンチュらしい感性が光る作品だ。花鳥画に関心のある人ならすぐにピンと来るだろうが、この絵は中国北宋時代の花鳥画で国宝《桃鳩図》(徽宗筆)をヒン

トに描かれている。仁添はこれをリュウキュウズアカアオバトとキームム(毛桃)に置き換えて表現した。この絵の放つ親しみやすさ、大らかな雰囲気、そしてそれを表現し得る技量の高さに、この島の先人たちから受け継がれてきたものが、形になって表れたように感じられた。

琉球王国時代、王府の絵師たちによって描かれてきた琉球絵画。その技術と伝統は、中国絵画や日本絵画の様式を取り入れながら培われてきた。それはまた地理的、歴史的に様々な文化が交じり合う、琉球特有の文化的特徴でもある。様々な要素が入り混じる仁添作品もそういう意味で琉球文化の複合的な特徴を備えている。本展で展示されている《蝙蝠蝶図》《蟻螂とヨナグニサン》など、シンメトリカルかつ平面デザイン的な画面構成の作品は、西洋、アジア、日本、琉球など様々な要素が合わさり、ひととき不思議な律動を放つ作品でもある。一言では形容し難いこうした多元的な作風もまた仁添作品の魅力となっている。



『蝙蝠蝶図』(絹本着彩・2022年)

さて、仁添はここ 2~3 年の間、自分の内側から自然に色や形が出てくるようになったという。その内なるものを大切にしながら、のびのびとこの地に根差す絵画を創造して行ってほしい。復帰 50 年という歴史の節目にあたる今年は、この先の未来像を思い描く時機でもある。仁添の作品がこの地に深く根を張っていき、そして琉球・沖縄の絵画史の土壌が豊かに耕されていくことを心から願いたい。本展は、仁添の新たな琉球絵画の創造にむけた、はじまりの旅。そんなイメージが膨らむ展示会である。

(沖縄国際大学非常勤講師/きんじょうみなこ)

生き物探しの旅

佐藤寛之

美術の世界の方々とは少し縁遠いところに「生き物屋（無類の生き物好き、のこと）」というひとたちがいる。虫ハカセや恐竜ハカセと呼ばれていた子供がそのまま大人になったと思ってもらえればだいたいあっている。何を隠そう私もその一人である。今回、美術に関しての知識や見識はさっぱりである、一生き物屋として画家「仁添まりな」の魅力を紹介してみたい。



『Agave(竜舌蘭と冠鷲)』(紙本着彩・2022年)

生き物屋とは、とにかく生き物を見ているだけで幸せになるひとたちだ。そのため多くの生き物屋さんにはひたすらインプット（見る）することによっての力を注ぎ続ける。彼女自身も時間の許す限り昼夜問わず山に分け入り生き物を見に出かけたり、標本作製したり、それらを眺めたりと、生き物屋としてインプットには余念がない。もちろんインプットに関しての情熱であれば彼女以上の生き物屋はそれこそ私の周りだけでも山のように存在している。しかしそうした界限でも彼女が稀有といえるのは、見たものを「作品」という形でアウトプットできる点に他ならない。意外に思うかもしれないがアウトプットを意識している生き物屋は希少なのである。

彼女の作品を最初に見たのは大学院の博士課程の作品展の時だ。展示室の角を曲がった瞬間、鮮やかに描き込まれたたくさんの生き物が目に飛び込んできた。大学院の課題ということで花鳥風月にのっとり作品群にはどれも細密な動物画が配置され、生き物や自然の面白さ、美しさ、威厳、

そうしたものが反映され全体として調和のとれた世界観を醸し出していた。こうした作品の細密さ迫力といったものは「技法」に裏打ちされていることはもちろんであるが、生き物屋だからこそのモチーフへの熱意、畏敬の念が作品に反映されていた結果と思われる。

特に最近では琉球王府の時代より描かれているモチーフとしての動物を含む「琉球列島の自然」を意識した作品作りに移行してきている。彼女が絵に興味を持つきっかけとなった田中一村にみられる凝縮された琉球列島の自然の姿である。

今後も生き物屋としての仁添氏の「目」を通して蓄積されていく琉球の自然という素材、それらたくさんの素材が彼女のフィルターで季節や時間、場所などに合わせて選択され、琉球絵画という技法を経てアウトプットされる、いわば彼女なりの確立した琉球の自然の表現方法なのである。今後も出てくる作品はこうした背景を経て生み出されていくのである。



『琉球闘鶏図』(絹本着彩・2022年)

もう一つ彼女の作品で気が付いてほしいのは「花鳥」や「アガベ」などの大型の作品にみられる隠された小物たちの存在だ。自然や生き物が持つ造形やデザインが隙あらば描き込まれ、まるであたかも作者からの「謎かけ」のような知的な好奇心をくすぐる仕掛けである。こうした一種の謎かけのような脇役たちに気が付き、その意味さえも理解するのは少し見る側に自然に対する知識や経験を求めることになるかもしれない。しかし、それであるがゆえにおぼろげながらも意味が分かった時の面白さはひとしおなのである。これは全体像を写した写真などでは見つけきれないかもしれない。ぜひ一度じっくり時間をかけて実物を前に「生き物探しの旅」に出てみてほしい。

(沖縄大学非常勤講師/さとうひろゆき)



制作する仁添まりな・2022年4月

琉球マインドを回復する旅

田原美野

「楽園」から飛び立つ鳥は、何処へ向かうのだろうか。

仁添まりなが画家として、自身初個展のタイトルに準備した「旅」の文字は、新しい世界への船出を思わせた。これからの出会いや、未知との遭遇に期待を感じつつ、これまでとは違う視点で表現したいという、仁添の意思表示にも思える。それは同時に、奇しくもこの歴史の節目の年に、琉球絵画史における、息吹と新時代到来を予感させた。

琉球絵画を研究しているという仁添の作品には、初見から目を奪われた。細やかな線描と、鮮やかでありながら深みのある独特な色彩、そして丁寧に描かれたモチーフの花や生き物からは、湿り気を帯びた「生命」のようなものが匂い立っていた。この異様な存在感を放つ作品は、どのようにして生まれたのか、作品はもちろん、作家本人にも興味がわいた。

仁添は大学院の研究で、中国と琉球の花鳥画を比較考察し、琉球絵画における「琉球なるもの」を表出しようと試みている。さらに、花鳥画の中に楽園性を見出しつつ、独自の楽園画を制作した。ここで重要なのは、仁添が考える楽園とは何かということである。仁添は言う。

「私にとっての楽園は、ほかの誰かや生き物にとって、地獄かもしれない。楽園は多様でいいし、生き物たちも多様でいいけれど、生きることを全うできる世界であってほしい。」

THE Gallery Voice No-66.2022.5.20 画廊沖縄

幼少期から草花や生き物が興味の対象であり、遊び相手だったという仁添。自然に親しむことのできる環境に恵まれ、それを愛する両親と祖母の影響は大きかったといえる。さらに仁添の作品にたびたび描かれる外来種や奇形としての異種、また人間によって始末された闘鶏など、主役にはなり難いモチーフに向けるまなざしは、一方的な美意識や価値観への問いかけと、自然界の厳しさや摂理に、美しさを見出そうとする視点にも思える。

「楽園」。それは沖縄に常についてまわる言葉でもある。しかしその楽園イメージとは対照的に、この島の豊かな自然は、危機的状況にある。山を削ったその土で、新しい土地ができ、海が消えてゆく。生き物たちにとって、住み慣れた場所を失うことは、種の存続を危うくする。そして自然環境の変化は、長い時間をかけて、人々の生活形式を変え、風習を変え、思考を徐々に変えていく。それは、衣食住、言語などをはじめとした、沖縄文化全体の存続と継承を困難にしていることと、無関係ではないように思う。

かつて此の地は琉球という国だった。大海を進貢船で往来し、大国中国、隣国日本、韓国・北朝鮮、そして東アジアの国々とそれぞれの関係を保ちながら、盛んな交易をおこない栄えた歴史をもつ。そこで育まれてきた琉球の文化は、異国の文化を巧みに取り入れ、独自のものとして昇華させ、その技や美を極めてきた。

国籍やパスポートを持たない鳥は、どこまで自由になれるだろう。歴史の節目を思いながら、この小さな島とここに生きる人々が、生を全うできる未来であることを願わずにはいられない。

(画廊沖縄スタッフ/たはらみの)

【仁添まりな 略歴】

- 1993年 沖縄県北谷町出身
- 2021年 沖縄県立芸術大学大学院後期博士課程修了
『VOCA2021 現代美術の展望—新しい平面の作家たち—』出展(上野の森美術館/東京)
『第10回菅橋彦大賞展』入賞(倉吉博物館/鳥取)
『第8回トリエンナーレ豊橋星野真吾賞展』入選(豊橋市美術博物館/愛知)
『琉球の横顔—描かれた「私」からの出発—』出展(沖縄県立博物館・美術館/沖縄)
- 2022年 『第73回沖展』絵画部門奨励賞(沖縄)
個展『No man's land—視点を変える旅—』(画廊沖縄)